# 温泉プールに新島村の未来を託す 伊豆市・天城温泉プールの視察 議員 青 沼 喜 六

今回の研修視察の目的は温泉を利用した温水プールによる新島村の活性化・再生の道を探ること。キーワードは少子高齢化社会にいかに対育・は少子高齢化社会にいかに療・教育・健康・観光等、様々な分野を射程に入れている。訪れた場所は伊豆中の伊豆市。ここは平成16年に半島中央の伊豆市。ここは平成16年に中伊豆町が合併して市となり、人口は3万1千人ほど。

私たち議員一行は5月17日朝、 島しょ会館前を貸切バスに乗って出 発。3時間ほど走行して到着し、当



日は市役所等を表敬訪問。「天城温水プール」は翌日訪れ、現場には 10 時半過ぎに着く。主管課の市の教育課の職員 2 名の案内で施設内 へ入る。屋内プールを正面の高い位置からながめる観覧席(プール とはガラス板で遮へい)で話を伺った。

説明は現場の責任者である水野氏。風貎はいかにも元水泳選手ら しいガッシリした体軀の年輩の男性。よく通る声で率直に運営状況 等話していただいた。

氏は指定管理制度により受託会社から派遣され、施設の管理運営から指導まですべて行っている。もっとも実際の現場での指導は主に彼の息子が当たっているという。氏の話ではなぜか息子の方が教え方うまいようで、みなさんの上達が早いと言っていた。そのときには 13 名の中高年の女性たちがプールの中で指導に従って歩いたり体操のようなことをしていた。



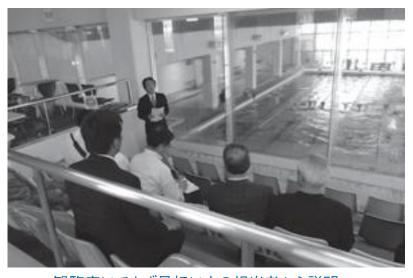
左側の通路奥の下ったところに温泉プールがある。

た後、31.5℃にしてプールに送水する。冬場はこの温度を確保する のが難しく、追い焚きをして調整している。

この施設は昭和53年に開館し、40年近く経ち老朽化が進み、近くに同様の温水プール(こちらは温泉利用ではない。合併によってプールが増えた)があることから平成30年末に閉館とのこと。

利用状況は年間 1万4千人(料金一般300円、子供150円)で、ほとんど教室利用者などの会員で現在、大人115人、子供50人が入会している。利用時間は朝10時から夜6時まで。これは人件費を圧縮するため交代なしで丸1日勤務できるようにしている。

経営に関しては市から2カ所のプールで3千4百万円の委託料を 受けるが、中々厳しく利用者の開拓で何とかしのいでいる。こういっ たことから光熱水費にも細心の注意を払い、電気の使用量が増える



観覧席にてまず最初に市の担当者から説明。

としょっちゅう照 明を消しまくって いるという。

定期的に交換している。

以上のことから新島村にも同様な温泉を利用したプール施設の実現性を探ってみた。確かに財源等には厳しいものがある。しかしトータルとしてのコスト面から考えてみる必要があるのではないか。健康増進では医療費や保険料の削減につながるし、何よりも高齢者の生きがい対策になる。現にプールでの運動を終えて帰り支度をしているお年寄りに伺ったところ、元気いっぱいで病気一つしていないという。

また小・中学生でオリンピック候補者になるような有望な子供も育っているということだから、これこそ夢の持てる確かな存在感のある地域社会に飛躍できる可能性を秘めている。もちろん観光面からも大いに貢献できるものと確信する。

## 東京都町村議会議員講演報告

5月16日、年に1回の議員研修として、東京都町村議会議員講演会『小さな町と企業を活性化する「競わない地方創生」』に議員一同参加。

#### ●講師が複数の視点から体験した地方創生を解説

講師の久繁 哲之介(ひさしげ てつのすけ)氏は、『地域再生の罠』や『商店街再生の罠』などの著書で知られています。IBM、自治体のアドバイザー、実家の飲食店など、いくつもの経歴をお持ちです。

### ●地方創生は『量より質』、『価格競争よりも共感』

『量を追うと低価格と効率の競争になり、強者=大都市・大企業だけが勝つ』ことを学びました。観光地としての新島村としては、大量生産・薄利多売の戦略ではなく、その土地の魅力・作る人・売る人・買う人とのつながりから生まれる、共感や物語を軸に戦略を組み立てるのが望ましいと理解できました。

#### ●地域の中でお金が回そう!

都市型の 『効率まちづくり』 では、チェーン店が全国から安い物を仕入れて低価格で販売するような戦略になるため、地域経済循環率が13%と低くなっています。 一方で質を重視した 『日本版スローシティ』 ともいえる戦